

小・中学校特別支援教育部

I 研究主題

通常学級における特別な支援を要する児童・生徒への指導法の研究

II 主題設定の理由

平成19年4月から、障害のある児童・生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行う「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、今年で5年目を迎えた。

制度的整備とそこで対象とされる発達障害に対する啓発が進められているが、障害の特性の理解やそれに基づく個別支援の在り方が中心で特別な場での指導が進められる一方で、通常学級における集団の中での指導・支援は十分とは言えない状況にある。

このような状況の中で、文部科学省が平成24年2月から3月にかけて全国（岩手・宮城・福島は除く）の小中学生の内、約5万4千人を対象とした調査結果によると、通常学級で学習障害（LD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）の可能性のある子どもは小学校で7.7%、中学校で4.0%に上がり、いずれも低学年ほど高いことがわかった。また、発達障害の可能性のある子どもに対して個別指導など、何らかの支援が行われているかを尋ねる質問に対して38.6%の教師が、「いずれの支援もなされていない」とする調査結果が報告され、発達障害をもつ子どもへの教育的対応が重要な課題となっている。

通常学級の担任には、学級に在籍するすべての子どもに対して細かな指導・支援を行うことが求められており、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症等、特別な支援が必要と思われる子どもが在籍している場合には、より一層の支援が必要となる。さらに、特別な支援を要する子どもが複数在籍すると、指導・支援はより困難さを増す。障害に関する専門的な知識を有し、適切な対応ができる教員は少なく、多くの教員が学校生活においてどのように対応すればよいか悩んでいる現状がある。

特別支援教育では一人一人の教育的ニーズに即した教育の在り方を探ることが求められ、個別指導計画の下、特別な場での指導が行われている。通常学級においては特別な教育的ニーズのある子どもにとって必要な支援を、どの子どもにとっても必要な支援ととらえ、学習内容や指導方法を工夫し一人一人の子どもの教育的ニーズを踏まえつつ学級集団づくりをすることが大切である。

発達障害のある子どもは、社会性やコミュニケーション能力が未熟なため、相手の気持ちを察したり、自分の気持ちを表現したりすることが苦手で友達との関わりの中で不適切な行動がみられることがある。しかし、子どもたちを取り囲んでいる社会の人間関係が希薄と言われている現代社会では、特別な教育的ニーズを必要とする発達障害のある子どもだけでなく、すべての子どものために対人関係を築いていくための知識や具体的なスキルを、学校で教えることが必要である。子どもの情動の背景にある要因を見つめ気持ちにより添いながらよりよい支援をしていくことは、学級のどの子どもにとってもお互いを理解し、支え合っていくために必要な支援と考える。

以上により、研究主題を「通常学級における特別な支援を要する児童・生徒への指導法の研究」とし、特別支援教育の視点に立ち、通級指導教室（発達・情緒）における指導法を基に、通常学級における社会性（円滑な人間関係スキル）の向上を目指した授業内容・指導法の研究に取り組んだ。

III 研究の内容

1 発達障害のある子どもの特性の理解

研究を始めるにあたり、通常の学級に在籍することが想定される発達障害のある子どもについて、その特性を大まかに整理した。

(1) 自閉性関連障害

通常の学級に在籍する自閉性関連障害の子どもは、知的発達に遅れの見られない高機能自閉症やアスペルガー症候群などが想定される。いずれの障害も社会性や強いこだわりが課題としてみられ、主に友人関係でトラブルが生じやすい。また、視覚的な情報を組み合わせることで指示が入りやすいという特性がある。

(2) 注意欠陥多動性障害 (ADHD)

年齢に不相応な多動性や衝動性、注意の散漫などが主な特徴としてみられる。注意が持続しにくかったり、様々な刺激に過剰に反応しやすかったりするため、落ち着いて学習活動に参加しにくいことが多い。また、ルールを守れなかったり衝動的な行動も多いため、友達と適切なかかわりを築くことが難しく、トラブルも多くなりがちである。一方で、興味のあることに対しては比較的よく集中するため、その子どもの興味・関心を引くような活動で注意を向けさせてから指示を出すと、指示が入りやすいことが多い。

(3) 学習障害 (LD)

全般的な知的発達に遅れは見られないものの、聞く、話す、読む、書く、計算するなど学習上のある特定の能力に遅れがみられる障害である。遅れのみられる能力により特性は異なるが、多くの子どもは短く、明確で、わかりやすい指示が入りやすい傾向がある。友達とのトラブルは多くないものの、自分から話しかけたり円滑なコミュニケーションが図れなかったりすることで、援助を求められなかったり孤立したりする傾向がある。

2 発達障害・情緒障害通級指導教室（以下単に通級指導教室）の指導について

以上のような特性を踏まえ、発達障害のある子どもに共通する特徴として、社会的なかわりやコミュニケーションに関する課題が多くみられることから、それらを改善するためのトレーニング方法を、通級指導教室の指導を参考に検討した。

(1) ソーシャルスキルトレーニング (SST) について

通級指導教室では、社会的状況場面で他者と適切なかかわりを築いたり、円滑なコミュニケーションを図ったりすることができよう、場面や状況に応じた関わり方のスキルをロールプレイを通して学習している。

① 内容 (実践例)

- ・挨拶の仕方（「あいさつジャンケン」「ペアさがし」「ボルトスゲーム」など）
- ・授業の受け方（適切な発言の仕方、姿勢保持、など）
- ・友達の誘い方（「さそって遊ぼう」など）
- ・会話の練習（「おはなしじょうずになろう」など）
- ・援助の求め方（「こんなときどうする？」など）
- ・社会的に適切なふるまい（「なにがおかしい？」など）

② 課題

- ・個別指導室のような構造化された場面では適切な行動が身についても、教室のような日常場面で応用（般化）することが難しい。
- ・一つのスキルを教えても、それに類するスキルに応用することができず、いくつものスキルを教える必要が出てくる（ソーシャルスキル辞典がどんどん増えていってしまう）
- ・スキルは身についても、感情のコントロールがうまくいかず、激しい感情が表出した時に身につけたスキルを利用することができない。

3 通常の学級に在籍する特別な支援を要する子どもについて

通常の学級で SST を行うにあたり、特別な支援を必要とする子どもがどの程度存在し、どのような様子なのかを把握するため、行動観察を行った。

(1) 特別な支援を要する子どもに共通する特徴

- ・一斉指導の際、注意が持続しにくい
- ・教師が説明をしている途中でだしぬけに答えてしまう
- ・教師や友達に対して、適切な援助希求が行えない
（例「わかんない」等の発言、無言で隣の子どもの持ち物を借りる、「教えて」等の言葉かけなしで、隣の子どものノートを覗き込む、など）

4 通常学級での SST

行動観察の結果から、課題となるスキルを特定し、それにそった SST を授業として行った。

(1) 課題となるスキル

最も多くみられた行動が、不適切な援助の求め方であったため、今回の SST のテーマを「援助希求」に設定した。

(2) 授業の前後で子どもたちにアンケート（資料参照）をとり、意識の変容を確認した。

(3) 授業を行う上での配慮事項

特別な支援を要する子どもの特徴や、発達障害のある子どもの特性から、以下の点に配慮をして授業展開を構成した。

① 視覚的な提示

注意の持続が困難であったり、どこに注意を向けてよいのかわからなかったりする子ども、あるいは、視覚的な補助なしでは活動を理解できない子どものために、タブレット端末と大型ディスプレイを用いて、活動を説明する計画を立てた。

② モデリング

スキルの教示には、具体的な行動をモデルとして提示し、実際にどのような言葉で援助を求めればよいのかをわかりやすくするために、教師によるモデリングを行った。

③ スキルの習得

スキルを習得する過程では、援助を求める側・援助する側双方の状況を理解するため、子ども自身がその両方を実際に体験する活動を取り入れた。それにより援助

の求め方を習得するとともに、適切に援助を求められた時と不適切に援助を求められた時の気持ちを知ること、適切に援助を求めることの必要性について考える機会を設定した。

④ スキルの般化

習得したスキルを応用する場面として、できるだけ日常生活の自然な文脈に近付けるため、グループ活動で物の貸し借りをを行う場面を設定し、般化をねらった。

5 実践例

小学校第2学年 ソーシャル・スキル・トレーニング学習指導案

平成24年11月29日 第4校時 2年2組教室 指導者 作井 佐代子

(1) 題材 ソーシャル・スキル・トレーニング 「援助希求」

(2) ねらい

- ・自分が何か困ったときには、適切な方法で他人に助けを求めることができる。
- ・不適切な方法で助けを求めると、相手から相応の援助を得ることができないばかりでなく、お互いが嫌な気持ちになることに気付ける。
- ・援助が得られた際には、適切な言い方でお礼の言葉を言うことができる。

(3) 身につけたいスキル

○言葉 ①「貸して」と言う

②借りたら「ありがとう」と言う

○行動 ①「〇〇さん」と言って、援助を求めるきっかけを作る。

②適切な言葉かけで援助を受けることができる。

③援助が得られたら、「ありがとう」を言えるようにする。

(4) 本時の展開

	学習活動の内容	指導上の留意点	資料など
導入	<p>1 今日の学習のねらいと約束をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みんなは2年生になって、もう半年がたちましたね。1年生よりは、お兄さんお姉さんになっていますね。でも、中には、まだ1年生の時と同じような話し方をしている人はいませんか？」 ・「たとえば、忘れ物をして友だちから借りようとするときに、何も言わないで勝手に借りてしまう人。貸してもらったのに、何も言わない人。そんな人はいませんか？」 ・「勝手に持ち物を借りられてしまうのは、どんなきもちですか？嫌な言い方をお願いされるとどんな気持ちですか？」 ・「今日は、2年生らしくお友だちにお願いする言い方を勉強します。」 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>やくそく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふざけない・はずかしがらない </div> <p>2 タブレット端末を使って、「お願いのしかた」についての意欲づけを図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れ物をして困っている様子の子どもの絵と、その席のとなり座っている子の絵を用意し、友だちに助けを求めたい気持ちになっていることを押さえる。 ・友だちに何かを頼む時に、どのような言葉で頼めばいいか、自分だったらどうするか考えさせる。 	<p>タブレット端末 大画面モニタ</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・学習上の約束を確認し、みんなが守れるようにする。 	<p>約束カード</p>

<p>展開</p>	<p>3 教師のデモンストレーションを見ながら、スキルを整理する。 【場面】 ・2つのパターンをモデルで示す。 ※パターン1 友だちの許可を得ず、勝手に消しゴムをとって使い始める。お礼も言わない。 ※パターン2 「〇〇さん、消しゴムを忘れちゃったんだけど、貸してくれる？」ときいて、「いいよ」と言われたら借りる。借りたら「ありがとう」とお礼を言う。 ・「どちらの頼み方がよかったですか？」 ・「どういうところがよかったですか？」</p> <p>4 本時の学習課題を知る。</p>	<p>・スキルのポイント 【言葉】 ①〇〇を貸してくれる？ ②ありがとう 【行動】 ①「〇〇さん」と言って、援助を求めるきっかけを作る。 ②適切な言葉かけで援助を受けるようにする。 ③援助が得られたら、お礼の言葉を言えるようにする。</p>	<p>スキルポイントカード</p>
<p>「〇〇さん、〇〇貸してくれる？」といて、お願いをする練習をしよう。</p>			
	<p>5 やり方の確認をする。</p> <p>6 グループに分かれて練習する。 ・授業中、消しゴムを忘れてしまったことに気づき、となりの子から借りようとする場面。 ①隣の席同士で「お願いする人」と「お願いされる人」を決める。 ②お願いする人は、パターン1とパターン2で1回ずつお願いされる人に物を借りる。 ③役割を交替して、演技する。</p> <p>7 グループでゲームを通して練習する。「1本でぬり絵」を行う。</p>	<p>・教師が見本を見せ、やり方と役割を押さえる。 ・約束の確認を全体で再度行い、個別の指示が必要な児童には個別に確認をする。</p> <p>・「お願いする人」と「される人」がはっきり区別できるように、お願いする人は体育帽(赤)をかぶる。 ・「〇〇さんと声をかけた」、「適切な言葉でお願いができた」、「ありがとうが言えた」等に気付かせ、そのようなやり取りが、いい気持ちになることに気付かせる。 ・どのような気持ちになったか発問する。</p> <p>・グループで役割演技をしたことを生かして、色鉛筆の貸し借りを練習する。</p>	<p>課題カード 体育帽子 スキルポイントカード</p>
<p>まとめ</p>	<p>8 学習のまとめをする。 ・「みなさん、とてもいいお願いの仕方ができるようになりましたね。お願いされた人は、丁寧にお願いされるとどのような気持ちになりましたか？また、ありがとうと言ってもらえて、どのような気持ちになりましたか？」 ・「『お願いの仕方』は、今日の授業で終わりではありません。今日から、授業中や休み時間などに困ったことがあったり、助けが必要になったりしたときは、丁寧な言い方で友だちにお願いをして、それをしてもらったら気持ちよく『ありがとう』のあいさつをしましょう。」</p>	<p>・振り返りカードに記入させ、お願いをする時のポイントを確認させる。</p>	<p>振り返りカード</p>

(5) 評価

何か自分が困ったときや、友だちにお願いをしたくなった時は、①「〇〇さん」と声をかけて、②〇〇してくれる？と丁寧にお願ひし、友だちから助けが得られた時には、③「ありがとう」と言うことが大切であると理解できたか。（観察・振り返りカード）

(6) 資料

友だちづくり

2年 組

◇チェックしてみよう！

①から⑩について「はい」か「いいえ」でこたえよう。
(あてはまるほうに○をつけよう。)

ぼくは・わたしは、

①友だちに えがおで あいさつしている。	はい・いいえ
②友だちとけんかをしないように 気をつけている。	はい・いいえ
③友だちと あそんでいて、カッとなることがあっても おこらず、がまんをする。	はい・いいえ
④友だちが、いやがることはしない。	はい・いいえ
⑤こまっているときに、友だちに たすけをもとめることができる。	はい・いいえ
⑥ こまっている友だちを たすけてあげることができる。	はい・いいえ
⑦ 友だちにめいわくをかけたら、あやまる。(ごめんなさいと言える)	はい・いいえ
⑧ 友だちから、ものをかりるときは、「かして」と言ってから かりる。	はい・いいえ
⑨ 友だちとの やくそくをまもる。	はい・いいえ
⑩ 友だちのはなしを さいごまでしっかり聞いている。	はい・いいえ
⑪友だちにたすけてもらったときに「ありがとう」と言える。	はい・いいえ

おねがいの し方 (ものをかりるとき)

年 組

1、お友だちに ものをかりるとき、どんなことに気をつけたらいいか、3つ書いてみよう。

2、ふりかえり

① あい手の気もちを大せつにした「もののかり方」がわかりましたか？

5	4	3	2	1
と	ま	ふ	あ	わ
と	ま	ふ	あ	わ
ても	ま	ふ	あ	わ
とも	ま	ふ	あ	わ
とも	ま	ふ	あ	わ
とも	ま	ふ	あ	わ
とも	ま	ふ	あ	わ

② ものをかりときのゲームをしてみ、わかったことを書いてみよう。

友だちづくり アンケート

2年 組

①友だちに ものをかりるときに どのように かりるとよかったか 書いてみよう。

②友だちに ものをかりお勉強をしてから、あなたは お勉強したように友だちにものを かりたりしていますか。

③友だちと なかよくするためには、どんなことに 気をつけたら いいと思いますか？できるだけ たくさん 書いてみよう。

6 参考資料

学級活動指導案

(1) 題材 ソーシャル・スキル・トレーニング「他者の視点に立つ」


(2) ねらい

- ・他者の視点に立ちながら、わかりやすい言葉で伝えることができる。
- ・相手にわかりやすく伝えることは、仲間との関係を築いたり、コミュニケーションを行ったりする上で大切であることに気づく。
- ・相手に伝える難しさを知り、自分の感情をコントロールすることができる。

(3) 身につけたいスキル

- 言葉 「右・左」「手前・奥」を作る人に合わせて伝えることができる。
「その言い方、わかりやすいね」等肯定的に表現する。
- 行動 ①伝える人は、作る人がわかりやすい支援の工夫を相談をする。
②伝える人は、作る人の視点に立って適切な声かけをすることができる。
③作る人は、適切な声かけが得られたら「わかりやすいね」等肯定的な表現をすることができる。

(4) 本時の展開

	学習活動の内容	指導上の留意点	資料など
導入 (5分)	<p>1 今日の学習のねらいと約束をつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「今日は最初に命令ゲームをします。先生が命令した通りに手を挙げてください。」 ・「先生も、みんなも言葉の通りに動いているのに、同じポーズにならないですね。人にわかりやすく伝えることは、とても難しいことですね。今日は、ゲームを通してわかりやすく伝える練習をしましょう。」 <p>2 本時の学習課題を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">人にわかりやすく伝えられるようになる。</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・命令ゲームを行う。右手に赤白帽子を持たせることで、左右の判別をしやすいようにする。教師は「右手あげて」「左手あげて」と指示を出す。教師は鏡ではなく手を上げることで、児童側との左右の反転に気づかせる。 ・学習上の約束を確認し、みんなが守れるようにする。 	約束カード
展開・前半 (20分)	<p>3 スキル「相手の見え方を考える」の意味を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「それでは、場面を見て『相手の見え方を考えるポイント』を探してください。」 <p>【場面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ※パターン1 教師が大きな声で色板を並べる指示を出す。イライラして、自分の見え方を押し付けようとする。 ※パターン2 教師が優しい声で色板を並べる指示を出す。「左・右」「手前・奥」の確認をしてから始める。途中、支援の相談もする。 <ul style="list-style-type: none"> ・「どちらの伝え方がよかったですか?」 ・「それぞれのパターンの良かったところ・良くなかったところはなんででしょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と児童1人で模範演技をする。 【スキルのポイント】 ・相手の見え方に合わせて「右・左」「手前・奥」を言い換えている。 ・相手が困っているときに「もう一度言おうか?」「大丈夫?」等の声かけができる。 ・作業する側は「わかりやすいね」など指示者に肯定的な評価ができる。 ・児童の実態に合わせて、パターン1が終わった後に振り返りをしてよい。 	<p>色板 (丸・三角・四角)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">色板並べ方・例</div> 

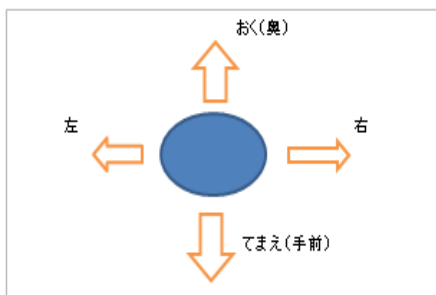
	<p>4 ペアで練習する。</p> <p>【場面】</p> <p>※パターン1 指示役が大きな声で、自分の見え方で作る役に伝える。</p> <p>※パターン2 指示役が優しい声で、作る役の見え方に合わせて伝える。</p> <p>・指示役・作る役の役割を交替して、演技する。</p>	<p>・児童の実態に合わせて、相手に<u>支援の相談</u>をさせてもよい</p> <p><左右がわからない子に対して></p> <ul style="list-style-type: none"> ・右手に「右」と、左手に「左」と書いてあるシールを貼る。 ・ついたてボードに「右・左」「手前・奥」と書く。 ・黒板の掲示シート①を見るようにする。 	<p>掲示シート① 掲示シート②</p>
後半 (10分)	<p>5 生活班で、ゲームを通して練習する。「色板伝言ゲーム」を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・色板は学年や児童の実態に合わせて形・色・枚数を考慮する。 ・ペアで役割演技したことを活かして、わかりやすく色板の並べ方を伝える練習をする。 ・途中でペアを変えて取り組むことで、相手に合わせた支援の工夫を考えられるようにする。 	<p>色板 (丸・三角・四角)</p>
まとめ (10分)	<p>6 学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みなさん、相手の見え方を考えて伝えることができるようになりましたね。相手の見え方を考えるときのポイントは何でしたか？また、相手がわかりやすく伝えてくれたときはどんな気持ちになりましたか？」 ・「『相手の見え方を考えてわかりやすく伝える』は、今日の授業で終わりではありません。今日から、学校生活の中でお話をするときに、「この言い方ならわかりやすいかな？」と考えるようにできたら、もっと友だちと仲良くなれますね。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りカードに記入させ、わかりやすい伝え方のポイントを確認させる。 	<p>振り返りカード</p>

(5) 評価

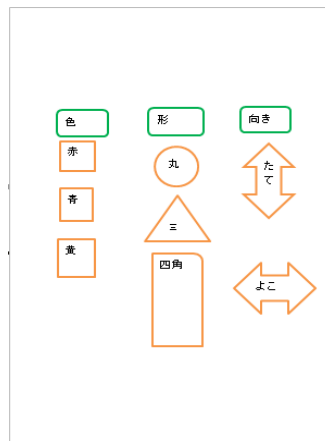
- ・相手の見え方を考えてわかりやすく伝えることができたか。
 - ・物事を伝えるときには、相手の立場に立って考えることの大切さが理解できたか。
- (観察・振り返りカード)

(6) 資料

掲示シート①



掲示シート②



振り返りカード

名前 ()

○相手にわかりやすく伝えるポイントを書きましょう。

○今日の授業で相手にわかりやすく伝える方法がわかりましたか。

5 とてもよくわかった
4 わかった
3 ふつう
2 わからなかった
1 ぜんぜんわからなかった

○今日の授業の感想を書きましょう。

IV まとめと課題

この研究を通してわかったことは、学級集団を育てることが通常学級の中で支援が必要な子どもへの有効な指導へとつながるということである。

実践例では、ひとつの「貸して」「ありがとう」というソーシャル・スキルを習得するために、①視覚的教材を用いた流れの提示、②教師のモデリング、③子ども同士のペアでのロールプレイという三段階をふんでいる。このように、ソーシャル・スキルを学ぶ手順を一つ一つ丁寧に行うことで、児童の望ましい行動に対する理解が促された。このことは、②の教師のモデリングの後子どもたちから自然に、「勝手に借りるのは変だよ」という発言がいくつか出ていた。それに対し、③の子ども同士のロールプレイの後の振り返りでは、「勝手に借りられると、嫌な気持ちになる」「ちゃんと言ってくれば、貸してあげると思った」「言ってくれたら、貸してあげたいという気持ちになった」「頼まれたらうれしい気持ちになった」「ありがとうと言われて、気持ちが温かくなった」と発言に広がりが出ていたことから、知識の定着が進んだと考えられる。

同時に、全員が「貸して」と頼む役、依頼を受ける役の両方を体験できるようにすることで、スキルの習得ができていく。そのため、その後の「1本でぬり絵」ゲームの中で自然と「貸して」「いいよ」「ありがとう」というやりとりが学級全体で生まれてくるようになった。振り返りカードを書く際に、普段は何気なく友だちの消しゴムを使ってしまっている子どもが、「あ、『貸して』って言うんだって」とつぶやき、学んだスキルをその場で活用できている場面も見られた。また、数週間後に振り返りをしたときには、「勝手に物を借りないで『貸して』って言う」「困ったときには、友だちに言う」「無断で借りると相手が嫌な気持ちになるから、『貸して』と言うようにしたい」という言葉が子どもたちから出てきた。こうしたことから通常学級でソーシャル・スキル・トレーニングを行うことは、スキルの般化に結びつきやすいと推測される。

通常学級の中におけるソーシャル・スキル・トレーニングの指導は、個別指導を行う通級指導教室以上の学習効果をもたらす可能性も考えられる。「教師や視覚教材のモデリングからの気づき」「知識としての理解」「ロールプレイを通しての練習と定着」という段階は個別指導で行うことが可能である。しかし、スキルの般化の段階においては、子どもと教師の一对一の個別対応で行われる通級指導教室では、実践する機会が稀少である。

それに対し通常学級の中では、モデリングの段階からモデルとなり得る対象が周りに多くいる。そのため「周りの友だちがやっているから、自分もやってみよう」という動機が生まれやすくなる。それは、学習の場が普段生活している通常学級であるため、周りの子どもが適切なモデリングとして機能し始めると、不適切な行動をしている子どもにとっては「自分は、まだできていないな」という自覚を促す作用も生まれていた。また、子どもも大人とロールプレイを行うよりも、子ども同士で行う方が自然と納得して取り組めるようにも感じられた。

ただし、通常学級でソーシャル・スキル・トレーニングを行うには、担任教師に学級全体を統制する力があることが前提になると考えられる。通常学級の中に約6%いると考えられる特別な支援を要する子どもたちの他にも、ソーシャル・スキルが身に付きにくい子どもは数多くいるからである。また、そのような特別な支援を要する子どもたちには、個別指導を行ってから大きな学級集団での指導した方が定着しやすくなる場合があることも

考慮しなくてはならないだろう。

通常学級の周りの子どもたちを育てることが、そのまま特別な配慮を要する子どもへの支援につながっているということが今回の研究の中で考えられた。子どもたちは集団の中で育つ力をもっている。その力を伸ばすための一つの方法として、通常学級においてソーシャル・スキル・トレーニングを繰り返し取り入れていくことは大きな可能性を広げていくのではないだろうか。